山口県立大学とラップランド大学における デザイン教育プログラムの共同開発に関する研究 －　二国間の地域資源を融合させる服飾デザインの ワークショップの事例について　－

水谷由美子*　マルヤッタ・ヘイッキラ＝ラスタス**　松尾量子***　パイヴィ・ラウタヨキ****

キーワード：山口県立大学　ラップランド大学　フィンランドデザイン　デザイン教育　教育プログラムの開発　国際大学間共同研究　地域資源　服飾デザイン　ワークショップ

はじめに

研究代表の水谷由美子は同僚の井生文隆のマネジメントによって、2007年３月にはじめてラップランド大学デザイン学部クロージング＆テキスタイル学科主催のファッションショーに学生を連れて参加した。その後､2008年に中国の青島大学とカタールのヴァージンコモンウエルス大学カタール校などに派遣され､ファッションショーを現地において行った。すでに2005年にはスペインのナバラ州立大学に派遣され交流会の中でファッションショーを実施した。

こうした経緯から学生が異文化体験を通して、相互に関わり日本で学習するだけでは得られない感性を獲得し、またグローバルな社会意識が芽生えるなど教育的な効果を感じていた。同時に、地域の歴史文化、芸術、自然さらに具体的な素材などを資源にするばかりでなく、服飾デザインの手法としてそれらを着想源とすることから、海外においてデザインのアイデンティティが日本文化あるいは地域文化にあることが理解され、デザインにおける国際交流が容易となっている。また、ファッションという国際的な分野であるが故に、グローバルなスタンダードで双方に共通の会話ができることがメリットとしてあることに気が付いた。

こうした経験を経て、海外の大学との共同研究の芽を探している時に、上記いくつかの大学との可能性を探った中で、ラップランド大学と国際共同研究が実現した。山口県立大学では国際文化学部文化創造学科企画プロデュース系の教員全員がグループとなり、ラップランド大学デザイン学部クロージング＆テキスタイル学科の教員と2009年から2011年まで、双方に交流をしてきた。

特に筆者は2009年から2011年の間、毎年１回学生をともないラップランド大学を訪問し、ワークショップを実施してきた。この経験から双方の大学で教育プログラムを開発する共同研究を立ち上げることになった。共同研究者の松尾は2010年のワークショップに参加した。我々のプロジェクトは双方向の共同教育プログラムの開発のために、2012年11月に筆者がラップランドを訪問してワークショップを実施した。他方で、フィンランドからラップランド大学大学院デザイン学研究科の教授マルヤッタ・ヘイッキラ＝ラスタ教授が山口県立大学を訪問した。その際に松尾はラップランド大学で2010年の共同研究と2011年に参加した国際服飾学会において実施されたフェルトのワークショップの体験を生かして、山口県立大学においてワークショップを実施した。その指導に、マルヤッタ教授が参加した。

共同研究の研究予算に関しては、本学側は山口県立大学研究創作事業の助成を受け、他方、ラップランド側も予算をつけて共同研究が開始された。以下では、本年度の実践された内容を報告するとともに、今後への課題を考える。特に、教育プログラムの開発の方法として、今年度は双方の大学に教員が出向き、ワーク

*山口県立大学国際文化学部・大学院国際文化学研究科教授
**ラップランド大学デザイン学部・大学院デザイン研究科教授
***山口県立大学国際文化学部准教授
****ラップランド大学デザイン学部講師

ショップや平常授業への講義や作品創作指導などを行いながら、互いのコンセプトの立て方や指導方法などを理解することから始めることにした。

とはいえ、時間の制約や予算の問題があったが、結果として本学から学生７名（学部生４名、院生３名）を伴ってラップランド大学に行くことが実現した。一方、ラップランド大学からは教員が１名、山口県立大学を訪問し、教育に参加することが実現された。

このような活動を実施している事例は、日本ではあまりみられないが、ヨーロッパではEU諸国の大学間での交流が盛んになってきており、ワークショップが行われている。2011年夏に国際服飾学会の研究会を受け入れ、交流をもっているアールト大学では４か国の学生が数か国に出かけていき、ワークショップを実施し、国際的な共同作品制作をしている。

以下では研究代表者の水谷が今回のワークショップの内容について記述し、その成果について検証した。4章は共同研究者の松尾が山口県立大学で実施したフェルトのワークショップについて記述している。

上記の2009年～ 2011年度の国際共同研究については「地域資源を生かした豊かな生活文化の創造をめざして － ラップランド大学と山口における地域プロデュースの実践的研究 －[注1]」に詳細が記されているので参考にされたい。

１． ラップランド大学におけるワークショップのためのプレゼンテーション

まず、ラップランド大学におけるワークショップ受け入れ責任者であるマルヤッタ・ヘイッキラ＝ラスタス教授が作成した計画に従ってワークショップを進めた（写真1）。

今回はワークショップをスムーズに進めるために、参加者同士が普段どのような仕事をしているのかを知り、共同作業を進めやすくするために、日本側の学生は資料を準備していた。筆者のプレゼンテーションの後に、７名の学生が一人ずつ３分間、パワーポイントを使い英語で発表を行った。ラップランド大学側は、フィンランド人３名、イタリア人２名そしてブラジル人１名の６名が参加しており、簡単な自己紹介を行った。

写真1

以下では今回のワークショップのテーマなどプレゼンテーションの内容を項目として記す。

（１）タイトル

教育プログラム作成に向けたラップランド大学における日本とフィンランドのワークショップ

「自然とは何か？絆とつながり　What is Nature?　Bond and connection」

（２）基本および継続テーマ

衣服、テキスタイルそしてインテリアのための地域資源を用いたサスティナブルデザイン

（３）地域資源（写真2･3･4）

ラップランド：フェルト（ヒーリング用自然素材と工業生産品を含む）　トナカイの皮革

写真2

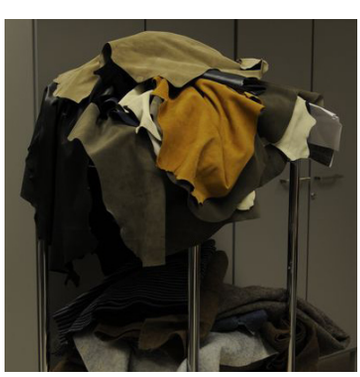

写真3

写真4

山口：柳井縞　デニム　徳地手漉き和紙

今回は特に徳地手漉き和紙を加工して紙布にして使用することを主な素材テーマにした。現代ファッションにおいて手漉き和紙を使用して話題となったものに、1982年における三宅一生のコレクションの事例がある（写真5）。

写真5

（４）2012年度のテーマ「自然とは何か？　絆とつながり」

2011年３月11日に起きた東日本大震災によって被災した地域の復興に向けた人々の生活の中で、地域のコミュニティ間や地域内外の繋がりそして家族の絆の大切さが再認識された。メディアを通じて、被災地域のみならず全国の人々にこの繋がりや絆を大切にするという人生観が広がった。

地域の主な建物や商店街すべてが津波にさらわれてしまい（写真6）、いまだ復興には程遠い状態にある岩手県陸前高田市の市長戸田太（とだふとし）の講演会が山口県立大学講堂であり、直接、現地の状況を聞く機会を得た。そこで、仕事と家族という間でのジレンマを抱えながら、家族を失うという悲劇、そしてそこから残された家族がいかに生きているかなど、市長自身の人生観も、コミュニティの問題と同様に話された。

写真6

こうした極限的状況においてのみ、実感できる「生きること」の意味について考えさせられたのだ。そこで、絆と繋がりをテーマにしようと考えた。ちょうど、テーマ設定を考えている時期に、テレビのニュースで陸前高田市が誇る沿岸部の高田松原を構成していた７万本の松林で、一本だけ残った松が枯れてしまい、それをモニュメントにするための工事費の募金活動が行われていることを知った（写真7･8）。戸羽市長は「この松のことを自衛隊員が奇跡の一本松と名付けた」と紹介された。自衛隊は物理的な復旧作業だけでなく、ロゴマーク制作や松の象徴化など文化的な面にも貢献している。

写真7

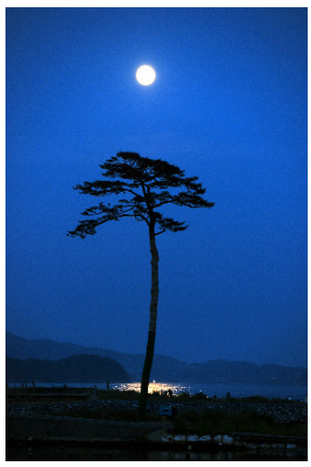
写真8

普段、自然は人々の生活と融和的に共生しているが、一度猛威を振るうと人々の生活を根こそぎ破壊してしまう恐ろしい存在である。今一度、自分の身の回りの自然について見直すことが大切であると考える。

そこで、2009年から始まったワークショップの基本的テーマである、エコロジーとサスティナブルは基本的テーマにした上で、最終的な2012年度の観念的テーマは「自然とは何か？　絆とつながり What is nature?　Bond and Connection」とした。

（５）山口における手漉き和紙と紙衣の歴史

今回のワークショップにおいて、日本側から提示したデニムや柳井縞については2009年から継続している素材であり、2010年から徳地の手漉き和紙を追加した。本格的に紙衣を中心に取り組んだのは今回が初めてである。

それは、2011年から徳地において地域の人々と共同で中山間地域活性化事業を実施している中で、徳地手漉き和紙がテーマとして浮上してきて、取り組んできているからである。

現在取り組んでいるのは、現在の衣服の創造でありそれをファッションと呼ぶべきか、単に服飾と言ったらよいかわからないが、生活着として山口から和紙ファッションを発信していけないかと考えている。

そこで、以下において日本における紙衣の歴史や文化について検証しておきたい。

日本では６世紀の仏教伝来とともに紙漉きの技術が輸入され、日本で独自の和紙文化が築かれてきた。信仰のために行われる写経、戸籍や地図、書籍そして障子や襖など、生活空間を作る道具などに使われてきた。

同時に、和紙は衣服に応用され紙衣（かみころも、かみこ、かみきぬ）あるいは紙子（かみこ）とも呼ばれ和紙による衣服文化が形成されてきた[注2]。

鎌倉時代の仏儀で用いられた僧衣が、歴史的に明らかとなっている紙衣の使用例である。東大寺の修二会いわゆるお水取りの行事において、修行僧は手漉き和紙を用いて自ら紙布を作り着物に仕立てたものを修二会の儀礼において着ており、現在までこの習慣は継続されている。現在の修二会のための紙衣は、白石和紙工房（宮城県白石市）で漉かれたものが使われている。生きた椿の木に手漉き和紙で作った椿の花が飾られるのも修二会での和紙使用の特徴である。

中世には武士の胴服に用いられ、おしゃれな衣服あるいは特権的な衣服として豊かなデザインがされている。紙布は十文字漉きつまり縦横両方に漉いた丈夫な漉手法で漉かれたものである。主に、繊維が長い楮が原料として用いられ、漉かれた和紙の表面に柿渋が塗られて丈夫になる。

江戸時代に入ると紙漉きが盛んになり、紙衣は一般の人々にも着られるようになる。そして風流を好む人々のおしゃれ着にもなった。松尾芭蕉が「冬の紙子いまだ着かへず　かげろふの我肩にたつ紙子哉」（冬のまま着込んだ紙子の肩に、ふと気が付くと陽炎がゆらいでいる、さすがに春だの意）[注3] あるいは「紙ぎぬのぬるともをらん雨の花」（紙衣の濡れるのもいとわず、雨中の花を手折るというところに、雨の中を路草の風雅をめでて訪ねてきたとの挨拶をこめた。）[注4] と詠んでいる。

芭蕉の俳句から、冬の防寒着として、あるいは雨合羽としても紙衣が用いられていることがわかる。

山口の地域資源としてどのように手漉き和紙の製法が伝わり発展したか。大内氏の時代に石見で紙問屋を営んでいた国東治兵衛（くにさきじへえ）の『紙漉重宝記（かみすきちようほうき）』（1798）年によると、7世紀に柿本人麻呂が晩年石見で過ごし、紙の製法が伝えられた。石見は大内氏の領内であり、大内氏にその質の高さ故に、唐土からも輸入の要望があった。そこで、大内氏はそれを認め、石長防の３州に紙漉き製造を推奨した[注5]。

その後江戸時代を通じて紙漉きが盛んとなり継承されてきたものである。平安末期から鎌倉時代初期に、東大寺再建のための建材を求めて重源上人が周防（現在の徳地や防府地域が主な活動範囲）に来て活躍した。それ故に、徳地地域では重源上人との関係で和紙文化が伝来されてきたと考えられている。いずれにしても、地域において紙衣の歴史に関する資料は見つかってはいない。

現在の山口県では徳地、岩国、山代にて紙漉きの伝統が継承されている。それは、大内氏の時代から毛利氏の時代に移り、毛利氏の「防長三白」（米・紙・塩）の政策の一環で紙漉きが推奨され、江戸時代を通じて徳地では紙漉きが盛んに行われてきた。

第２次世界大戦後しばらくまで、徳地島地の藤木地区などではほとんどの家で紙漉きが行われていた。かつては、農家の農閑期である冬の仕事であった。現在では千々松哲也と山内幸夫の２件のみで、産業として紙漉きが行われている。その他に、重源の郷（山口市徳地）の白波という手漉き和紙工房で、一般の人への普及を目的とした紙漉き体験が行われている。同時に、そこで若手の紙漉きの後継者が育ってきている。

（６）徳地手漉き和紙で現代ファッションを創作

以上に述べたように、手漉き和紙は徳地地域の伝統工芸あるいは産業である。徳地地域のまちづくりや観光関係者ばかりでなく行政として山口市も後継者をいかにして増やし、伝統を生かして活性化するかを課題にして、支援をしているのが現状である。

筆者の研究室では中山間地域活性化の活動を2011年から取組み、徳地の手漉き和紙に注目してきたのは以上のような理由が大きい。そこで、2012年のプロジェクトから手漉き和紙から作った紙布を用いた現代的な

紙衣を作ることを、課題に取り組みはじめた。

今回のラップランド大学でのワークショップではフィンランドと日本のセンスを融合させて、紙衣を創造することも、新しい徳地の和紙の表現の可能性を広げようとする目的をもっていた。現地ではイタリア人やブラジル人の留学生も合流したので、国際色豊かな感性でそれぞれ４グループの作品が制作された。

さて、ここで紙布について説明しておく。一般的には紙布は２種類の方法で作られる。一つは紙糸が作られそれが材料となった織物である。経糸と緯糸が両方紙糸で織られるものはあるが、それはむしろまれであり、現在織られている事例から判断して、経糸は絹や綿さらに麻などが用途によって使われ、緯糸に紙糸が使われて織られている。

他方は紙漉きによって漉かれたままの紙から加工が加えられ紙布が作られる。今回のワークショップでは後者の紙布を用いることから、以下では徳地手漉き和紙を用いた紙布の作り方(注6)について、水津初美が行ったデモンストレーションを紹介する。

（７）紙布の作り方

ここでは簡単に説明することにする。具体例は写真を参考にしてほしい。１）まず紙に水を霧吹きでつけてもみほぐす（写真9）　２）よく揉み解した紙を棒に巻いて上下にしごいてさらに紙を柔らかくする（写真10）　３）寒天を水で煮る（写真11）　４）寒天を揉み解した紙の上に塗り、乾かす（写真12）

以上のような工程にて紙布を作る。寒天を塗る理由は、紙をもんだりしごいたりすると表面が毛羽立つために、寒天（蒟蒻いもでもよい）を煮たものをはけで塗ることで上質で均一な表面の紙布が出来上がる。

ワークショップでは４グループが手漉き和紙から簡易な紙布を作り、材料に用いた。さらに、１つのグループでは染色によって豊かな紙布の表情を表現できた。

写真9

写真10

写真11

写真12

（８）ラップランド大学のプレゼンテーション

資料１のマルヤッタ・ヘイッキラ＝ラスタスMarjatta Heikkil?-Rastas教授が作成したスケジュールにあるように、マルヤッタ教授指導下で、３名の講師のプレゼンテーションがあった。

WS　１日目

まず、パイヴィ・ラウタヨキ Päivi Rautajoki,とエンミ・ハルユニエミ Emmi Harjuniemi, によって、筆者のプレゼンテーションの後に、今後の進め方の指導があった。グループ決め、アイデア出しのミーティング、ムード・ボード作成などの順に行われた（写真13･14）。

写真13

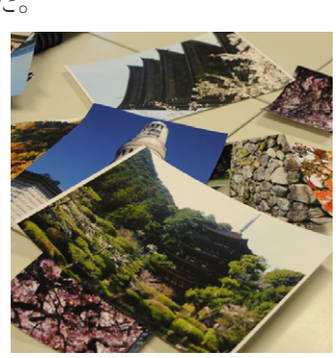
写真14

ムード・ボード作成後はアイデアスケッチと素材の選択を行った。次に、素材を決定するとともにムード・ボードも完成させ、デザイン画を決定する（写真15･16）。

WS　２日目

プレゼンテーション１：講師　ヘイディ・ピエタリネン Heidi Pietarinen（テキスタイルコースの講師）　タイトル「ＴＣジャガード織機の可能性」（写真17）

テキスタイルとクロージングの教育における研究室ツアー（写真18）

プレゼンテーション２：講師エンミ・ハルユニエミ（クロージングコースの講師）

タイトル「ファッション分野におけるデジタルによるヴィジュアライゼーションと針を用いたフェルト製作の指導」

サンタクロース村の見学（写真19）

大学での制作

WS　３日目

プレゼンテーション３：講師パイヴィ・ラウタヨキ（クロージングコースの講師）

タイトル「レクトラを用いた３次元のパタンメイキング」

WS ４日目

制作

講評会（写真20･21･22）

写真15

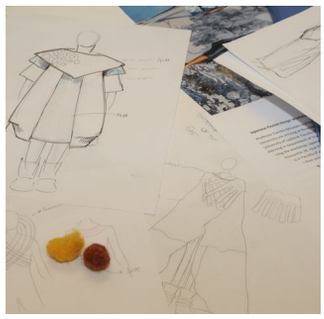
写真16

写真17

写真18

写真19

帰国日の午前中にアルクティクム博物館、コルンディ現代美術館、ホッパナ織（裂き織）工房およびショッピングセンターや街歩きを行った。

なお、ロバニエミ市に滞在する前の３日間にヘルシンキに滞在し、世界のデザイン都市に選ばれ、多くのアートイベントや改装された町並みなどのフィールドワークを実施した。特に、本学の卒業生でマリメッコのファッションデザイナーをしている大田舞の案内で、マリメッコ本社のショールーム、製造工場、デザインスタジオそしてファクトリーショップなどを見学した。

まず、フィンランドデザインの特徴に触れてからラップランド大学でのワークショップに参加したことで、

写真20

写真21

写真22

フィンランドの学生の特徴を理解しやすい環境を作った。

２年目の参加となるリイッカ・カルカヤ Riikka Kälkäjäは大学院に進学しており、彼女から学部卒業時に作成したポートフォリオの紹介があった。すべて英語で書かれており、デザインのコンセプトを素材、色、形などの観点からシミュレーションをしたポートフォリオのプレゼンテーションは、非常に個性が表れており、参考になった。学生たちが総合的に他大学の学生の成果から学んだことは大きな成果であった。

また、このポートフォリオには、2011年度のワークショップの作品やファッションショーでの写真が含まれており、その見せ方にも感心させられた。現地では－10度の戸外でドラマティックなファッションショーを実施していることが彼女の作成した写真資料からも理解される。

２．グループ作品とプレゼンテーション

以下ではマルヤッタ教授が分けた４つのワークショップのグループごとに、作品テーマ、コンセプトさらに制作に関することなどについて、それぞれの担当した日本人学生が主に執筆したものをまとめて記載している。特に、この章ではワークショップに参加した大学院生の淺田陽子が全体を統括して執筆しているので、ここに記しておく。

１）作品タイトル：「Nature」

メンバー：佐藤 亜紀子　リリア・シーレ Lilia Schire　ソルヤ・テンメス Solja Temmes

我々のグループは、ムード・ボードを制作した時に使用した自然の写真と、今回の提示された素材からインスパイヤーされたものに基づき制作した（写真23）。

写真23

はじめに、和紙とデニムを用いたロングドレスを制作した。スカート部分は霧吹きで湿らせた和紙を揉んで皺加工させた後、縫合していった（写真24･25）。トップはデニムを用い、和紙のスカート部分の質感を活かすようにシンプルにまとめた（写真26）。その後、このロングドレスをベースに、３人それぞれの発想を展開させ、３着の上着を制作した。

写真24

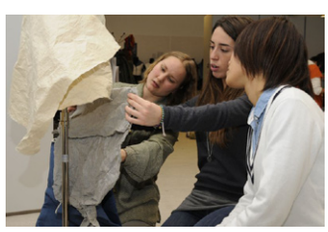

写真25

ソルヤ・テンメス Solja Temmesは、白い木や白い壁の画像からイメージを膨らませて、フェルトとデニムを融合させたビッグなシルエットの上着を制作した。白いフェルトと青のデニムのコントラストが美しくダイナミックな作品に仕上がった。

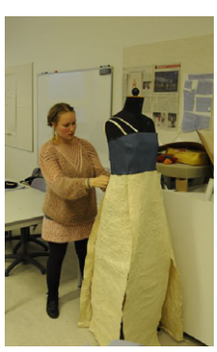

写真26

写真27

写真28

リリア・シーレ Lilia Schireは、青のデニム、白とチャコールグレーのトナカイの皮を使って3色の帯状の造形的な作品を仕上げた（写真27）。

佐藤 亜紀子はトナカイをイメージし、茶色とグレーのトナカイの皮を用いてトップを制作した（写真28）。衿の部分にはトナカイの角の形状をデフォルメしたものをあしらった（写真29）。

写真29

今回のワークショップでは英語でコミュニ

ケーションが行なわれたため、意思の疎通が困難であった。素材選びの時、ドレスの色を決める時、それぞれの意見が異なりその都度、身振り手振りで自分の意見を懸命に伝えようと努めた。ここで得たものは、納得がいくまで他者の意見を聞くこと、他者の感性を尊重すること、限られた時間を有効に使うことである。

多くの人々とめぐり合い、多くのことを学んだ海外研修であった（写真30）。

写真30

★クリスマスファッションショー 2012でのプレゼンテーションの場面（写真31･32･33･34･35･36）

写真31

写真32

写真33

写真34

写真35

写真36

２）作品タイトル：「Water Cycle」
メンバー：淺田 陽子　ファビオ・サントロ Fabio Santoro
リッサ・ヴァッリウス Liisa Vallius

自然界には様々な形態の水が存在している。我々のグループでは、「絆とつながり」というテーマに基づき話し合った結果、変化を遂げつつ地球上を回る水に着目することにした。タイトルは「Water Cycle（水の循環）」である。生命の源である水（雨、雲、氷、海）を、清らかさ、力強さ、儚さ、優しさなど、多面的に表現し制作していった（写真37）。

はじめに、海をイメージしたパンツを制作した。イメージ画像は日本の角島の海である。日本から持参した柳井縞は濃紺の色彩が美しく、豊かな海の色を表現するには最適であった。また波の大きなうねりを現す為に、裾幅をたっぷりととったシルエットのワイドパンツを平面製図からパターンを作り、それを立体裁断法で完成させた。この時に問題となったのは生地の量である。柳井縞は本来、着物1着分である約38cm×12mがおおよその規定量であり、ワイドパンツを制作する為の十分な分量が確保できるかどうか、また我々のグループのみがこの柳井縞を使用しても良いものかどうかという点で制作進行について慎重になった（写真38）。幸い他のグループとの交渉の結果、持参したもので十分足りることがわかり、最初のイメージ通りの豊かなシルエットのパンツが完成した（写真39）。

次に着手したのが、氷をイメージしたビスチェである。ここでは日本から持参したデニムと和紙を重ね合わせたものを折りたたみ、氷の透明感のある質感を表した（写真40）。薄い和紙と皺状の和紙の2種類を交互に重ねることにより、白色の微妙な濃淡が現れ深みのある色合いに仕上った。このビスチェは、ジグザグに折り畳んだ生地を胸元に当てベルトでフィットさせるという極めてシンプルなデザインであったが、ワイドパンツとの組み合わせが美しくグループメンバーの皆のイメージに沿った出来ばえとなった。ここで制作したベルトは、柳井縞と濃紺のトナカイの皮を用いた。これは視覚的にもウエスト部分を引き締める効果があった。

最後に、フィンランドの素材であるフェルトを用いて雲を表現したオーバーコートを制作した。この制作においてフェルトを人体に巻きつけつつフィッティングさせていく立体裁断法が用いられた。緩みのたっぷりと入ったシルエットは、ドレープがきれいに現れるように前身頃部分がカッティングされ、ネック周りには雨の雫をイメージした編地が施された。この編地はトナカイの皮を７ミリくらいの幅にカットし、衿の寸法に合わせてかぎ針でアトランダムに編んだものである（写真41）。このコートは、皮素材とフェルトとの組み合わせが新鮮な質感となり、またベージュと濃紺の色彩も美しくまとまり、皆の納得のいく作品が完成した（写真42）。

写真37

写真38

写真39

写真40

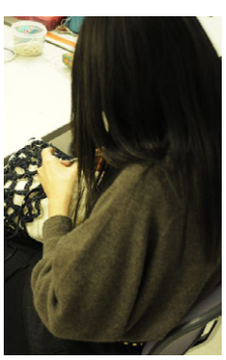
写真41

写真42

今回のワークショップは、イタリアからの留学生ファビオ・サントロ Fabio Santoroがイメージに沿って、直感的にダイナミックな提案を行い、フィンランドの留学生リイサ・ヴァッリウス Liisa Valliusが何度も試作を繰り返しながらそのイメージの形を探っていく、という精緻な手法で進められた。このように各自のそれぞれ違った感性やプロセスは時にはぶつかり、また融合し合って、ひとつの作品「Water Cycle」が完成したのだ（写真43）。今回のテーマである「絆とつながり」を強く感じるワークショップであった。

写真43

★クリスマスファッションショー 2012でのプレゼンテーションの場面（写真44･45･46･47）

写真44

写真45

写真46

写真47

３）作品タイトル：「connect」
メンバー：岡田 祥実　原田 真衣　アマンダ・ルッソ Amanda Russo

当グループは、自然の中にある有機的な曲線を幾何学模様で表しワンピースを制作した。具体的には自然界にあふれる木の枝のカーブをイメージしている（写真48）。素材はフィンランドの地域資源であるフェルトとトナカイの皮革、山口の地域資源である徳地和紙とデニムで（写真49）、それらを繋ぎ合わせることで、今回のテーマである“つながり”を表現している。

写真48

写真49

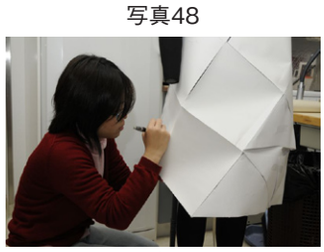
写真50

先ず立体裁断で四角いパーツをつなぎ合わせていき、全体のシルエットを形作っていった（写真50）。四角の組み合わせによって美しいAラインが表れ、襟元の鋭角のラインがこの

ワンピースのポイントとなった。

色彩は、この四角いモチーフのシンプルなデザインを強調するために、デニムとトナカイの皮革の青、和紙とフェルトの白の２色でシンメトリーに構成していった。

ここで岡田 祥実は当初、髪飾りとして制作していた細かい四角の組み合わせを、背面に配置することに計画を変更した。大きな四角のパターンだけでは大味な印象となり、バックスタイルに細かい細工をほどこし、有機的な印象を持たせるためである。ここでは土台にデニムを用いて、フェルトや和紙やトナカイの皮革を貼り付けていく手法で形成していった（写真51･52）。ワンピースの部分は主にアマンダ・ルッソと原田 真衣が担当した（写真53）。

写真51

写真52

写真53

写真54

このようにして、２色の配置が美しく大胆でシャープな印象のワンピースが完成した（写真54）。しかし、途中でメンバーのアマンダが突然のアクシデントに見舞われ、最終的には２名で仕上げていく結果となったことは非常に残念であった。

★クリスマスファッションショー 2012でのプレゼンテーションの場面（写真55･56）

写真55

写真56

４）作品タイトル：「春の白樺に寄り添うトナカイ」

メンバー：石川 智香子　水津 初美　リイッカ・カルカヤ Riikka Kälkäjä

当グループのムード･ボードには､白樺の木や楠や四季折々の木々の写真が並んだ。フィンランドと日本の自然、特に両国の様々な樹木よりインスピレーションを受けてイメージをしぼっていった（写真57）。

写真57

そして話し合いの結果、フィンランドの白樺をテーマに選んだ。白樺はフィンランドの自然の象徴であり、日本の和紙が白樺のような質感やフィーリングを兼ね備えていると感じたからだ。そして季節は春を選んだ。

３人の分担は、リイッカはワンピース、水津は素材、石川はアクセサリーを制作した。

若葉のさわやかさをだすために、柔らかく揉んだ和紙の質感を損なわないように黄緑色でグラデーションに染め、春の淡い雰囲気を表現した（写真58）。また補色であるブルーのデニムと組み合わせ

写真58

ることにより、和紙の柔らかさを強調した。これらの素材を用いて立体裁断を行いミニ丈のワンピースを完成させた（写真59）。

このワンピースに石川が白樺をイメージしてベルトを制作し、添えることにした。芯の部分に普通紙を丸め、その上に和紙を巻いて白樺の形状を表現した（写真60）。これら数十本の筒状の和紙をトナカイの皮のテープで繋げて白樺並木を表現した個性的で立体的なベルトが完成した（写真61）。

さらに、このワンピースの上にはおるケープを加えることになった。素材はトナカイの皮を用い、話し合いの結果、自然の形状をそのまま活かすことになった。皮の柔らかな乳白色がワンピースの萌黄色を際立たせ自然のドレープも美しいケープが完成した。

最後に、細く切れ込みを入れたデニムに和紙をクロスさせて市松模様の生地を水津と石川で作った（写真62･63）。デニムと和紙が織りなす生地は絆を表現している。それを後日、リイッカがトナカイの皮を添えてコンパクトなバッグに仕立てた。ワンピースと共にコーディネートし、春の軽やかさを表現するアイティムのひとつになった。

今回は、グループのメンバーがそれぞれ得意な分野の能力を十分に発揮することができたワークショップであった（写真64）。

写真59

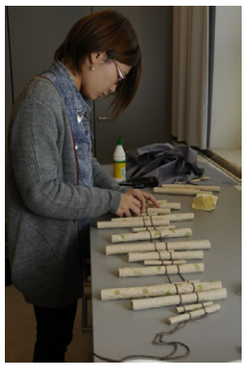
写真60

写真61

写真62

写真63

写真64

★クリスマスファッションショー 2012でのプレゼンテーションの場面（写真65･66）

写真65

写真66

３．ラップランド大学教授による山口県立大学における授業

マルヤッタ・ヘイッキラ＝ラスタスが、筆者の要望を聞き入れ、12月４日から８日まで山口県立大学を訪問し、筆者および松尾の授業やワークショップに参加し、教育プログラムの開発に貢献した。クリスマスファッションショーの直前で、学生たちは最後のまとめにはいっているところであった。所用のためにマルヤッタ教授は本番前日のリハーサルにのみ立ち会ったが、ラップランド大学でのワークショップで作成した作品のモデルによるプレゼンテーションについて、有効なアドバイスを学生に与えたので非常に教育的効果が実感された。

① 服飾デザイン実習　12月４日（火）

服飾デザイン実習では、学生はクリスマスファッションショーにおけるクリスマスファッションコンテストに応募して、デニムを使ったクリスマスのためのおしゃれなファッションデザインをしていた。５名の学生の内、はじめて服を作る学生が４名だったことから、悪戦苦闘してデザイン画通りの作品を作った。

まだ、立体裁断法や被服構成の技術さらに完成度のある仕上げをすることの重要性や技術を習得していない面があった。

そこで、マルヤッタ教授はひとりずつに的確なアドバイスを与えた。学生たちは素直にアドバイスを受け入れ、作品をよりよいものに仕上げることができた。ファッションというメディアを通じて、学生たちも言葉の壁があるものの、趣旨が十分に伝わっていたようである。ワークショップにラップランドに出かけなかった学生たちが、マルヤッタ教授の来校でフィンランドのデザインや衣服についての考え方に触れることができ、大きな価値があった。

② 生活文化論での講義　12月６日（木）（写真67･68）

フィンランドのファッションデザイン史および現代のファッションデザインについての講義を得た。まず、パリのオート・クチュールに影響されていた1920～30年代頃のファッションデザイン、現代ファッションデザインの基礎となった1950代、特にマリメッコを代表されるように徐々にテキスタイルの柄が重視されたフィンランド独自の特徴が生まれてきた固有のファッション形成期、そしてマルヤッタ教授が自分の母親が経営していたファッションメーカーに勤めた1970年代前後のファッション業界の基盤変化について話された。この時代はパリを代表としてオート・クチュールからプレタポルテに移行した。それ故に、一点ものではなく、工業製品としてのファッションが発展して行った話など興味深い内容であった。

写真67

写真68

特に最後に、サスティナブルについて考えさせられるマルヤッタ教授自身がデザインした服の紹介があった。彼女がフィンランドから持参した服が制作された年代や生地が作られた年代などがミックスしており、どれが新しくどれが古いかなど、判断がつかないものが多かった。ファッションにおけるサスティナブルに関するフィンランド流の一つの提示の方法が示され興味深いものであった。

③ 企画デザイン論での講義12月６日（木）

「サスティナブルで責任があり革新的な衣服デザイン － サスティナブルな発展におけるデザイナーの責任」と「衣服デザインとリサーチにおける実践と理論の結合 － サスティナブルで革新的な解決」についてのテーマについて話された。エコロジカルな活動をしている企業の紹介や現代的な意義、さらにボディスキャナーを使用した身障者や高齢者などの衣服についての解決方法など革新的な実験や実践的なデザイン法が紹介された。

４．フェルトのワークショップ

（１）フェルトとの出会い

2010年11月にラップランド大学において開催した国際共同研究によるワークショップの際に、日本側から地域資源として提供したのはデニム、柳井縞、徳地和紙、竹であり、ラップランド大学側からはトナカイの革と羊毛（wool）が提供された。羊毛はフィンランドでは伝統的に生活の様々な場面で使用されてきたという背景を持っており、ファッションはもちろん日常の生活雑貨の素材として広く使用されている。ラップランド大学では地域資源としての羊毛についての研究や教育が行われており、カリキュラムの中で取り上げられている。山口県立大学との共同ワークショップでは、羊毛生地の提供と共に羊毛からフェルトを作成するというワークショップが組み込まれていた（写真69･70･71･72）。

写真69

羊毛からフェルト[注7]を作成する方法は、大きく２種類に分かれる。

写真70

写真71

写真72

一つは日本でも手軽な手芸として人気のあるニードル（針）を使用するもので、アクセサリーなど小物を制作するのに適している。もう一つはラップランド大学で体験することのできた石鹸と温水を使用する本格的なフェルトづくりである。繊維の流れにそってほぐした羊毛を重ね合わせ、石鹸水をかけてもみ込んでいくという作業によって羊毛の繊維が絡み合いフェルト化がなされる。最後に温水で石鹸を洗い流し脱水の後に乾かすことでフェルトが完成する。このワークショップは、筆者に素材の特性を手の作業を通して体感することが素材への関心を深めるという点において重要な学びとなることを気付かせてくれた。

翌2011年８月に共同研究者である水谷が企画した国際服飾学会海外研修会では、研修内容にラップランド大学でのフェルト・ワークショップが組み込まれ、筆者もまた日本からの他の参加者と共に参加した（73･74･75）。この時はフェルト・ワークの基本であるボールの応用と羊毛の特性をいかした成形作業を体験することができた。これは、出来上がりを想定した上で縮み分量を予測して型を作り、その上に羊毛を巻き付けフェルト化させ、最後に切り開いて袋状にするというものである。フェルト・ワークは、手を動かしながら羊毛の分量を調節することで出来上がりのフェルトの堅さやサイズを調整することが可能である。一方で羊毛の段階で最終的なかたちをイメージするには、羊毛に関する知識と共に豊かな経験値が求められる作業でもある。羊毛の繊維としての特質やフェルト化の理論やプロセスを自分の手を通して体感することは、筆者にとって羊毛という素材の可能性を考えるという意味で貴重な経験であり、何らかの形で文化創造学科

写真73

写真74

写真75

の学生に還元したいと考えるようになった。

（２）山口県立大学でのフェルト・ワークショップの試み

2011年８月のラップランド大学でのワークショップにおいて、フェルト・ワークの基本である羊毛を手のひらで丸めて作るボールをもとにアクセサリーへと展開するアイデアを学んだことは、本研究において山口県立大学でのフェルト・ワークショップの開催を計画する上で大きなヒントとなった。当初は筆者が担当する「文化創作実習」の中での開催を考えたが、2012年度は試行として授業外で行うことにした。その理由としては、本研究がラップランド大学との共同研究による教育プログラム開発であることから、時期はラップランド大学の教員が来日する12月に開催する必要があるため、「文化創作実習」の授業プログラムの中に組み込むことが難しいと判断したからである。ワークショップは、ラップランド大学のマルヤッタ・ヘイッキラ・ラスタス教授の来山にあわせて12月７日（金）15:00-18:00に第一回目のワークショップを実施した（写真76･77）。参加者は文化創造学科２年生８名である。ワークショップのテーマは「フェルト・ボールを使ったアクセサリー」である。学生には事前にどのようなアクセサリーを作るかを考えてきてもらい、そのイメージにあったフェルト・ボールを作った（写真78）。参加者８名の中には経験者がいたため、フェルト作りのノウハウを教え合う等、楽しみながらの作業となった。終盤には、マルヤッタ教授に参加していただき、学生たちのフェルト・ワークに対してコメントしていただいた。完成したフェルトは乾燥させるために時間が必要なので、2013年２月８日（金）に第２回ワークショップを実施してアクセサリーとして完成させた。

写真76

写真77

写真78

今回、試行版としてフェルト・ワークショップを実施した事で、実際に羊毛がフェルト化する過程を通して、学生たちは羊毛の繊維としての特徴やフェルト化の意味などについて体験的に理解したようである。しかし、一般に日本ではフェルト・ワークとは手芸の領域であるというイメージが強いこともあって、短いワークショップの体験だけでは、素材としての羊毛の表現の可能性を広げるまでは至らなかった。今後、ラップランド大学で行われた羊毛に関する研究等から、フィンランドの地域資源としての羊毛の位置づけや今日的な意味を検証することによって、授業プログラムへと展開する方法を探る予定である。（文責：松尾量子）

まとめ

ラップランド大学では最近、スロベニアの学術提携大学においてワークショップをはじめた。海外滞在型のワークショップ以外に、ラップランド大学では今年のワークショップにみられるようにイタリアやブラジルからの交換留学生がフィンランド人学生とともに参加している。こうした経験からも複数以上の国際的な環境での共同制作は言語的なコミュニケーションに課題はあるものの、それぞれの国の感性や造形手法を比較検証することができることから、教育的な効果があった。

今後の課題として、複数の大学間でのワークショップを行い、出版物を出して世界にアピールしようという計画がマルヤッタ教授との間に持ち上がっている。継続することで、さまざまな教育プログラムの成果と新たな展望が開けてくる。

学生サイドのプログラム参加の効果について考察をすると、デザインを志しているものは往々にして自己心が強く、共同で作品を作ることが苦手である。今回のように3人ずつでグループを組み、言葉の壁がありながら、２ケ国あるいは３ケ国の学生同士で作品を作るということは、個々の学生には大きなハードルがあっ

た。

当初は泣き出してしまう学生もいたが、幸いすぐに制作に集中していた。また言葉だけでなく、3人の学生が一定の方向にテーマを絞ることは容易ではない。ただ、ムード・ボードが果たす役割が大きかった。互いに視覚的に頭に描いているイメージを写真の切り抜きをボードに張り、視覚を通して交流し合えたからである。

写真79

4日間でおおよそ作品が完成し、夕方には合評会ができたことは驚きであった。2011年には約6日をかけて制作をしたので、このスピードには両大学の教員が驚いた。デザインが決断されると学生たちはそれぞれ自分の役割の守備範囲を決めて、次々に制作をしていった。午後3時のコーヒーブレイクなどでリラックスしながら、4か国の学生が交流を楽しむことができた（写真79）。

特に制作へのアドバイスについてはパイヴィ・ラウタヨキが大いに貢献した。これは2009年から毎年のことであるが、パイヴィの活躍なしには作品は仕上がらなかったと考える。

写真80

ハードな4日間の間、余談になるが筆者はコンセプトに関する他に、メンバー同士の親睦も同一作品を作る上で大切と考え、夕食2回と昼食1回を大学の会議室にしつらえられた台所を使って作った（写真80）。シャブシャブ、手巻き寿司、トナカイの肉と野菜の炒め物、味噌汁など、食事にも日フィンの文化的融合を表現し、双方の文化に対するおだやかな意識の違いを喚起させた。

学生たちは最後のお別れの挨拶では涙を流し、別れを惜しんだ。わずか4日間に濃密な時間を過ごすことで、大きな心の交流をもったに違いない。同時に、服飾デザインに関する表現法や制作法について、感性のレベルから技術面について交流ができたことだろう。「感動すること」が学ぶ心を開き、モチベーションも高める要因だと信じる。

教育カリキュラムの開発に関して、本学の国際文化学部の服飾デザインに関するカリキュラムは、服造りの基礎の実習をしている松尾担当の生活デザイン実習とデザインを学習する服飾デザイン実習が順番に履修されず、基礎がまったくない学生にデザインをさせて作ることをさせることもあり、実際に技術が伴わなく、教員がかなり手をかけなければならない場合もある。技術が必要な専門では科目が積みあがる方式が望ましいことを改めて主張したい。

また、現在のカリキュラムではテキスタイルに関する実践的授業がない状態であり、ラップランド大学にワークショップに行くことで服飾造形の基礎から応用までの総合能力をアップすることができると考える。この点において、学術提携校での学習を継続して行うことからメリットが生まれており、さらにすばらしいパートナーシップが築かれてきたことは非常に喜ばしい結果である。

注

1　水谷由美子　井生文隆　田村洋　松尾量子　小南英昭　山口光　小橋圭介　「地域資源を生かした豊かな生活文化の創造をめざして － ラップランド大学と山口における地域プロデュースの実践的研究－」『山口県立大学学術情報』５　山口県立大学、2011年、109-134頁。を参考。

2　和紙の造形文化や歴史についてはサントリー美術館「美しの和紙 ―　天平の昔から未来へ　―」展（2009年9月19日（土）～11月3日（火・祝））およびそのカタログ『美しの和紙 ―　天平の昔から未来へ　―』サントリー美術館　2009年を参照。

3　大谷篤蔵・中村俊定共校注　『芭蕉句集』日本古典文学大系45　岩波書店、1969年、27頁。

4　先掲書、56頁。

5　寿岳文章監修　国東治兵衛『紙漉重宝記（かみすきちようほうき）』（浪華書林1798）復刻版、光彩社、

1975年、2頁。
6　紙布や紙衣の歴史や作り方について吉岡幸雄 「紙衣・紙布」『染織の美』23　京都書院、1983年、81-90頁を参照。
7　羊毛は、繊維の中では最も吸湿性に優れていると同時に撥水性と保温性を併せ持っている。羊毛をはじめとする毛繊維は、表面が鱗状のスケールに覆われ、さらに繊維自体がクリンプ（捲縮）と呼ばれるよじれを持っている。羊毛が吸湿性と撥水性、保温性という一件矛盾するような特質を併せ持っているのは、他の繊維には見られないスケールとクリンプを持つからである。文化服装学院編『アパレル素材論』、文化出版局、2000年、27-29頁参照。

資料１
ラップランド大学におけるワークショップのスケジュール　マルヤッタ・ヘイッキラ - ラスタス作成
Japanese -Finish Workshop 2012 in Lapland
Japanese-Finnish Design Workshop 5.11 - 9.11. 2012
Professor Yumiko Mizutani and her seven students from Yamaguchi Prefectural University are arriving at Rovaniemi airport on 4.11.2012. Working in workshop in University of Lapland, Faculty of Art and Design begins at 9.00 o'clock Monday morning in Department of Textile and Clothing Design, Pöykkölä, Laajakaista. During the workshop Japanese students are living in dormitory “Metsäruusu” Metsäruusuntie 18, near Pöykkölä-campus and they can come and go to workshop in Faculty of art and design Pöykkölä by foot. If they need to go to city, they can use free university buses at 13.00, 17.00 or 20.00.

SCHEDULE FOR THE WORKSHOP
MONDAY 5.11.2012
9.00　Opening of Workshop, Professor Marjatta Heikkilä-Rastas
9.10　Presentation of themes and inspirations for workshop, Professor Yumiko Mizutani
9.45　Short introduction of all students participating to workshop（Japanese, Exchange-students, Finnish Students）
10.15　Introduction of materials, ideas, goals and targets of workshop, Päivi Rautajoki, Emmi Harjuniemi, Marjatta Heikkilä-Rastas
10.30 Guiding and starting *Mood-Board-working* with creative ideas
12.30 -13.15 Lunch break
13.15 Developping ideas of Mood board and starting to sketch, choosing material
15.15　coffee break
15.30 - 16.45 Material decisions, ready mood-boards, defining sketches
17.00 Bus transportation from Pöykkölä to main University
17.30-19 Get together with all participants in main University, Felli-restaurant
TUESDAY 6.11.12
10.00 Starting second day workshop
10.00-11.00 Presentation of TC- jacquard-weaver and its possibilities, Heidi Pietarinen
11.00 - 11.45 Quided tour to laboratories in Textile and Clothing education
11.45-12.45 Presentation of Digital visualisation and quiding to needle-felting, Emmi Harjuniemi
12.45 -13.30 Lunch break
13.30　Bus transportation to Santa Claus Village
14.00 -15.00 Visiting Santa Claus Village and Naoko Matsubara's exhibition place

15.00 Bus transportation back to University-Pöykkölä-campus
15.30 -19.30 Workshop working continues, realizing products
WEDNESDAY 7.11.12
9.00 Starting third day workshop
9.15 Presenting 3 D -modelling by Lectra, Päivi Rautajoki
10.00 Workshop going on
12.00 -12.45 Lunch break
12.45 Workshop continues
14.30 Coffee break
15.00 -16.45 Workshop
17.00 Bus transportation to “Rotko” -campus（To Pilke by foot?）
17.30-18.00 Short visit to “Pilke” Center of Forest Governement
18.30 Students evening together（workshop participants）
Professor Mizutani, Heidi Pietarinen, Kristiina Hänninen and Clothing design staff invited at 19.00 to Marjatta Heikkilä-Rastas, Hillapolku 12. A 25.
THURSDAY 8.11.12
9.00 Final workshop-day start
9.15 - 12.00 Workshop
12 -12.45 Lunch break
12.45 Workshop continues and finalizing products
16.30-18.00 Presenting the results of workshop
Transportation to Christmas Village by taxi
18.30 - 20.00 Visiting Naoko’s exhibition in Christmas Exhibition House
Back to city and dormitory by taxi

FRIDAY 9.11.12
Meeting in Pöykkölä in the morning???
Japanese are leaving at 14.05 from Rovaniemi airport

■　画像説明文

１　マルヤッタ・ヘイッキラ＝ラスタス(左)とパイヴィ・ラウタヨキ(中央)と水谷由美(右)　2012年11月5日
２　フィンランドの地域資源を見るパイヴィ（左）と水谷（右）　2012年11月5日
３　トナカイの皮　2012年11月6日
４　和紙とフェルト　2012年11月5日
５　三宅一生　1982年　紙衣
６　陸前高田市の動く七夕の瓦礫
７　奇跡の一本松（昼）
８　奇跡の一本松（夜）
９　紙衣制作過程（その1）　2012年10月23日
１０　紙衣制作過程（その2）　2012年10月23日
１１　紙衣制作過程（その3）　2012年10月23日
１２　紙衣制作過程（その4）　2012年10月23日
１３　ワークショップ初日のミーティング　2012年11月5日
１４　山口県の自然を写した画像　2012年11月5日
１５　ワークショップムードボード制作　2012年11月5日
１６　ワークショップデザイン画　2012年11月6日
１７　ヘイディ・ピエタリネンによるプレゼンテーション　2012年11月6日
１８　機織機の見学　2012年11月6日
１９　サンタクロース村の見学　2012年11月6日
２０　グループA 「Nature」講評会　2012年11月8日
２１　グループC 「connect」講評会　2012年11月8日
２２　グループB 「Water　Cycle」講評会　2012年11月8日
２３　ムードボードを制作するグループA（作品タイトル「Nature」）　2012年11月5日
２４　和紙に霧吹きで水分を吹き付ける　2012年11月6日
２５　和紙のスカートをデザインする　2012年11月6日
２６　ボディーに和紙を巻きつけるソルヤ・テンメス　2012年11月7日
２７　帯状のトップを羽織るリリア・シーレ　2012年11月8日
２８　トナカイの皮に型紙をあてる佐藤亜紀子　2012年11月7日
２９　プレゼンテーションを行う佐藤亜紀子　2012年11月8日
３０　プレゼンテーションを行う佐藤亜紀子とリリア・シーレとソルヤ・テンメス　2012年11月8日
３１　クリスマスファッションショー　2012　作品「Nature」モデル：松尾綾子　2012年12月9日
３２　同上
３３　同上
３４　同上
３５　同上
３６　同上
３７　ムードボードを見るグループB（作品タイトル「Water　Cycle」）2012年11月6日
３８　柳井縞の使用について交渉するリッサ・ヴァッリウスと淺田陽子とファビオ・サントロ　2012年11月6日
３９　ワイドパンツを制作するリッサ・ヴァッリウス　11月8日
４０　和紙のビスチェを制作するリッサ・ヴァッリウスとファビオ・サントロ　2012年11月8日
４１　トナカイの皮を編む淺田陽子　2012年11月7日
４２　コートを制作するファビオ・サントロとリッサ・ヴァッリウス2012年11月8日
４３　プレゼンテーションを行うファビオ・サントロとリッサ・ヴァッリウスと淺田陽子　2012年11月8日

４４　クリスマスファッションショー 2012 作品「Water Cycle」モデル：小山華奈　2012年12月9日
４５　同上
４６　同上
４７　同上
４８　ムードボードを制作するグループC（作品タイトル「connect」）　2012年11月5日
４９　素材を選ぶ原田真衣と岡田祥実とアマンダ・ルッソ　2012年11月5日
５０　立体裁断をする原田真衣　2012年11月7日
５１　小さい四角のパーツを制作する岡田祥実（その1）2012年11月8日
５２　小さい四角のパーツを制作する岡田祥実（その2）　2012年 11月8日
５３　ミシンをかけるアマンダ・ルッソと会話する原田真衣
５４　プレゼンテーションを行う原田真衣と岡田祥実　2012年11月8日
５５　クリスマスファッションショー 2012　作品「connect」モデル：柳瀬彩乃　2012年12月9日
５６　同上
５７　ムードボードを制作するグループD（作品タイトル「春の白樺に寄り添うトナカイ」）　2012年11月5日
５８　和紙を染める水津初美　2012年11月7日
５９　デニムと和紙でワンピースを制作するリイッカ・カルカヤ　2012年11月8日
６０　和紙のベルトを制作する石川智香子　2012年11月8日
６１　プレゼンテーションをする石川智香子　2012年11月8日
６２　和紙のテープを作る水津初美　2012年11月8日
６３　デニムに和紙を刺していく水津初美　2012年11月8日
６４　プレゼンテーションを行う石川智香子と水津初美とリイッカ・カルカヤ　2012年11月8日
６５　クリスマスファッションショー 2012　作品「春の白樺に寄り添うトナカイ」モデル：日髙彩菜　2012年12月9日
６６　同上
６７　生活文化論でのマルヤッタ教授による講義　2012年12月6日　A-32教室
６８　マルヤッタ教授の講義を聴く学生たち　2012年12月6日　A-32教室
６９　ワークショップの様子　ⅰ　2010年11月8日～11日
７０　ワークショップの様子　ⅱ　2010年11月8日～11日
７１　ワークショップの様子　ⅲ　2010年11月８日～11日
７２　フェルトの参考作品　2010年11月11日
７３　基本のフェルト・ボールづくり（2011年8月20日、22日　国際服飾学会フェルト・ワークショップ）
７４　型に羊毛を巻く　（2011年8月20日、22日　国際服飾学会フェルト・ワークショップ）
７５　ワークショップの成果　（2011年8月20日、22日　国際服飾学会フェルト・ワークショップ）
７６　ワークショップの様子　2012年12月7日
７７　マルヤッタ教授による指導　2012年12月7日
７８　完成したフェルト・ボール　2012年12月7日
７９　コーヒーブレイク　2012年11月7日
８０　日本食のパーティー　2012年11月6日

■　写真撮影者リスト

Riikka Oikarainen	1・2・3・4・13・14・15・16・19・20・21・22・23・24・25・29・30・37・38・42・43・48・49・50・54・57・60・61・63・64・80
Janneke Kors	17・18・26・27・28・39・40・41・51・52・53・58・59・62・79
松原 和麻	31・32・33・34・35・36・44・45・46・47・55・56・65・66

松尾 量子　　69・70・71・72・73・74・75・76・77・78
浅田 陽子　　57・60・61・63・64・80

■　写真出典リスト

5　白石和紙で作られた ISSEYMIYAKE「紙衣」 1982年　写真　EIICHIRO SAKATA
http://www.2121designsight.jp/program/spilit_tohoku/exhibits.html 2012年12月1日取得

6　阿部武司（東北文化財映像研究所代表）提供

7　Jacob Ehnmark 2011年5月6日　崩壊した陸前高田ユースホステルと希望の１本松
http://ja.wikipedia.org/wiki/ファイル:Collapsed_Rikuzentakata_Youth_Hostel_and_a_Pine_Tree_of_Hope.jpg

8　「中秋の名月」に浮かび上がった一本松「月光が包む『奇跡の一本松』陸前高田」
http://www.asahi.com/special/10005/TKY201109120509.html 2012年12月1日取得